

氏名	臧 傑
ヨミガナ	ソウ ケツ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第699号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）友禅染技法と中国刺繍技法の融合研究と応用 —中国神話哲学の芸術表現の可能性— （作品）存在の情懐

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	上原 利丸
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	橋本 圭也
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三上 亮

（論文内容の要旨）

友禅染は日本独自、かつ最も代表的な染色工芸であり、その特徴は精緻で美しく多彩な表現力にあると考える。中国の染色技法には友禅染と同じ技法は存在せず、友禅染の特徴はクリエイターに自由で幅広い表現空間を与えている。友禅染は私の創作ニーズを満足させてくれるだけでなく、既存の他の工芸技法の利用では達成が十分にできず、不可能だった表現の限界を解決し、その精緻で自由な表現力は最大限に芸術的創作のニーズを満たしてくれる。

これと同時に、友禅染の基礎を把握・運用するにあたって、自身の創作のオリジナリティを発展させるため、本友禅の技法を他の技法と組み合わせ運用することで、現代において新たな表現を持ち、新たな可能性が生まれるであろう。例えば、中国刺繍には独自の美感があると私は見ている。この刺繍の魅力とは、多彩さと技法が生み出す豊富な階層感や立体感、材料の質感表現や独特の装飾性などがあることであり、これらは時に代替不可能な技法ではないかと考える。友禅染技法の美しく繊細で、自由であり、完成度が高い優れた点が刺繍の技法と組み合わせたり、新たな表現方式ができることを私は心から望んでおり、単に二つの技法の美しさを結びつけるのではなく、創作テーマを意識して融合し、独自の技法的言語を作り出すことを目指す。

「民族的なものほどグローバルなものである」という言葉は現在の世界美術界において有用な表現であり、現代の欧米的な風格を有する創作への飽くことない追求よりも、むしろ根源へ帰帰すべきであり、自身がそもそも持つ民族文化と知識を利用することが、東アジアの特色ある伝統的かつ固有の文化を現代工芸の領域まで押し上げると考える。

本論文は友禅染の技法と中国の刺繍技法に対する融合研究と応用を通して、中国神話哲学の芸術表現の可能性を示唆するものである。第一章では、主に創作の根拠となる神話哲学の観点を述べる。宗教儀礼は歴史的には、極めて安定していて、千年を経ても各時代の社会生活の構造の中で変わらず維持するため、既存の宗教儀礼に関する記録から、すでに失われた上古時代の儀式モデルとそれに相応する神話哲学の観念を推測したり、復元したりすることができる。第二章では、主に創作過程で用いられた表現技法に焦点を当て、日本の友禅染と中国刺繍の二つの部分から、なぜこの二つの技法で創作したのかを分析した。本章の中で、まずは日本友禅染と中国刺繍の歴史的発展と主要な特徴をまとめた。そして、研究の過程で創作した作品に合わせて、この2つの技法のそれぞれの独自性と、2つの技法を融合して使用したときに現れた効果を発見し、今後の創作によりよく応用されるように提言を行った。第三章では、主に博士学位審査作品について述べた。この章で、まず私の創作構想いかに形成され、また創作の中で出てくる主な模様の要素とそれが象徴する意味を説明した。次に作品の創作過程に関わる思考のプロセス、作品の展示形態、

色合いの確立、技法と観念の融合、具体的な制作過程などを紹介した。最後にまとめと今後の展望を述べた。

今回の博士学位審査作品のテーマは「存在の情愔」である。手には世界を変えたり、万物を創造したりする能力がある。それは強さ、包容力、誠実と善徳を代表している。縄は絆と伝承を代表していて、昔から平和と幸福への追求を表現している。人々は更に縄を神、人、鬼の三分世界の境界線と見なしている。神話が表象した宇宙の法則の全過程は無限循環する、私心のない献身的な状態である。

「神話を歴史の始まりとして、いかに原初の宇宙観を表現し、人類の心理の方向性を導き作り上げたのか、神話とは本質的に何を表しているのか、文字の制約を受けない歴史とはいったいどの様なものであろうか、有史以前の人類の生存方式は大変恐ろしいものだったのだろうか、未発達で野蛮だったのだろうか、人と自然の関係は本当に進歩したのだろうか…」これらの疑問と再考により、中国神話により深く入りこみ、日本の友禅染と中国刺繍を組み合わせた技法による創作と芸術表現の可能性を研究したい。

(論文審査結果の要旨)

臧傑氏は、友禅染と中国刺繍の融合というきわめてユニークな技法を特色とするのみならず、濃密かつ深淵な心象表現を特色とする作家である。課程博士学位申請論文は、提出作品の背景となる思想や技法について詳細に述べたものとなっている。

第一章では、発想の源である中国神話哲学について論を繰り広げる。神話の宇宙観、世界観、さらには哲学を論じたうえ、神話の虚実を問うのではなく、豊かな生態学的な知恵の継承を訴える。本章で言及されている項目はきわめてスケールが大きいもので、本来は別の論文テーマとして深く掘り下げるべきであろうが、創作のアイディアとして申請者なりにまとめることは、ともすると深淵な哲学や宗教を避ける傾向にある工芸の創作において好ましい態度であると考えます。

第二章では、友禅染と中国刺繍の技法についての特色が述べられる。友禅染の糸目糊による白線の美しさや平面表現としての魅力、中国刺繍が加わることによる別の色彩表現や立体感等が論じられている。技法のもっとも中心となるアイディアが論じられているものの、やや単純な表現にとどまっており、なお言葉を尽くす必要も残される。

第三章では、博士提出作品のコンセプトと技法が豊富な写真資料とともに論じられている。イメージ・ソースから発想に至る過程、制作工程など提出作品を後付けするうえでも十分な記述がなされている。コロナ禍で渡日が難しい時期があり、なおかつ言葉のハンディがあるにもかかわらず、論の構成、記述内容、体裁において十分な努力のあとを見ることができると高く評価したい。以上、提出作品の背景や技法等を補完する内容として遜色ないと思われ、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

作品題目「存在の情愔」は、3枚1組の合計7点で仕上げられ、7点の理由としては創作における生から滅に至る循環・輪廻の概念を表現しており、これはテーマの神話哲学とも整合性がある。作品構成・配置は、作品の左側から徐々に中心に向かって視点が上方へ移動し、また中心から作品右側へ向けて下の方へ視点が移っていくような流れがある。主に「手」と「縄」のモチーフの組み合わせにより三種類の感情「空」「円」「静」の方向性を表現している。色彩と配色についても神話的題材からテーマに合う色調を選択している。

技法は日本の伝統染色技法である友禅染技法と中国の伝統芸術の一つの刺繍技法を使用しており、中国出身の申請者は、日本で作品制作を通し友禅染技法を習得し、現在では精緻で安定した糸目糊おきが可能となり技術的な観点では高い評価ができる。また、本作品においての友禅技法は、技法の精度の高さか

ら感じられる象徴性の表現として適しており代替えが不可能なものと言える。中国刺繍に於いては、リサーチを重ね技法を習得した結果、本作品の中の刺繍技法の表現としても使用できるレベルに到達した。論文題目「友禅染技法と中国の刺繍技法の融合研究と応用」の融合という点では、論文中に友禅染が主で刺繍が補助という表記があるが、使用している刺繍糸が大変細くさらに友禅染の生地と同素材であるために作品全体としての刺繍表現の印象が薄くなっているが、見方を変えれば一体感や統一感があり、違和感のない技法の融合・併用とも言える。

染色作品の重要な要素「素材」「技法」「図案」のそれぞれの観点から、検証・計画され芸術表現としての染織作品の追求がなされている。この先も作品の大きさの吟味や友禅技法と刺繍技法融合の比率の検証、素材や色材の検討など、作品制作研究を継続して行い、中国神話哲学と友禅技法・中国刺繍技法の絶妙なバランスで接点が存在する芸術作品を期待している。

以上の内容から、審査委員会全員一致で博士作品の水準に十分達していると判定した。

(総合審査結果の要旨)

友禅染めの定義は定まっていないが、一般的には「多色の模様染」が無難なようである。その技法の中で糸目糊を用いた「本友禅染」は着物における意匠の多様性を生みながら中心的な存在として現在まで続いている。本友禅染特徴は絵画的で緻密な表現が可能なところにある。明治以降、化学染料の登場によって、糯米の糊に染料を混ぜ型紙等を使用して染色する「型友禅」の技法が生まれる。申請者は型紙ではなく友禅染の渋筒を道具として、いわゆる「写し糊」の技法を本友禅染と併用して研究制作してきた。

友禅染は江戸中期に確立された技法と言われているが、長い歴史を持った伝統的染色技法であることは間違いない。それだけにあらゆる意匠や表現が出尽くしていると言っても過言ではない。また、博士論文・作品においても過去の先行文献との差異はどこにあるのか、独自性や新規性はどこにあるのかを精査しながら、生涯かけての研究テーマを見出さなければならない。

論文題目「友禅染技法と中国刺繍の融合研究と応用」は、日本独自の染色技法である友禅染と日本刺繍ではなく中国刺繍を融合するという独自性を有したテーマとなっている。さらにその芸術的表現として中国神話哲学を核にしているところに新規性がある。申請者が中国人であることで、現代の欧米的な風格を有する創作への飽くことのない追及よりも、むしろ根源へ回帰すべきであり、自身の持つ民族文化と知識を利用することが、東アジアの特色ある伝統的かつ固有の文化を、現代の工芸の領域に押し上げると考えるのは当然の帰結といえる。

博士論文の第一章では創作の根拠となる神話哲学の観点を既存の宗教儀礼に関する記録をもとに失われた上古の時代の儀式モデル、それに相応する神話哲学の観念の推測、復元が可能なことが適切に述べられている。第二章では創作における日本の友禅染技法と中国刺繍技法の融合の必然性を、お互いの歴史的発展・特徴をもとに、これまでに創作した作品を事例に述べている。必然性については説得力に欠けている面があるが、第三章の博士作品において説明できていると判断する。

第三章の博士作品の作品題目は「存在の情愔」である。情愔とは本心＝手、この手をメインに「縄」とのモチーフとの組み合わせにより三種類の感情「空」、「円」、「静」の方向性を表現している。作品構成7点の数字の意味合い、創作における生から滅に至る循環・輪廻の概念は神話哲学とも整合性が取れている。さらに色彩と配色の素材と染料との検証、友禅染の表現に対する中国刺繍技法の適合性は一体感や統一感があり成功している。今後新たな融合の芸術作品の展開を期待している。

以上の内容から、審査委員会全員一致で博士論文・作品の水準に十分達していると判定した。